

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲医第 1540 号	氏名	池内 真由美
審査委員	主査 島田 光生 副査 西岡 安彦 副査 池田 康将		

題目 Drug-induced interstitial pneumonia during perioperative chemotherapy for breast cancer
 (乳癌周術期化学療法中に薬剤性間質性肺炎を発症した症例の検討)

著者 Mayumi Ikeuchi, Naoki Hino, Aya Nishisyo, Mariko Aoyama, Miyuki Kanematsu, Hiroaki Inoue, Soichiro Sasa, Tomohiro Inui, Naoki Miyamoto, Kazumasa Okumura, Hiromitsu Takizawa
 令和4年 発行 The Journal of Medical Investigation 第69巻第1, 2号 107ページから 111ページに掲載済み
 (主任教授 滝沢宏光)

要旨 薬剤起因性間質性肺炎(Drug-induced interstitial pneumonia: DIP)は稀であるが、ときに致死的となる有害事象である。発症すると治療を中断せざるを得ないため予後への影響も懸念されるが、発症リスクや治療、DIP 治癒後の癌治療に関しては未だ不明な点が多い。

申請者らは2019年1月から2020年12月までに徳島市民病院において周術期化学療法を受けた乳癌患者のうち、治療前のCTで肺炎像がない74名を対象にDIP発症の特徴や発症後の治療などに関する検討を行った。

得られた結果は以下の如くである。

1) 74例中12例(16.2%)にDIPを発症し、化学療法開始から

30-94 日で DIP と診断された。DIP 発症群と未発症群に年齢、術前化学療法、ステージ、喫煙歴、サブタイプに差はなかったが、DIP 発症群は未発症群と比較してアレルギー歴を有する割合が高かった (75.0% vs 59.7%)。また DIP 発症群では全例に cyclophosphamide の投与歴があった。

- 2) 肺炎の臨床病型の検討では、分類可能であった症例は全例ステロイドへの反応性が良く予後が良好とされる過敏性肺炎パターンであった。DIP 発症例においては、薬剤中止と診断早期のステロイド治療により全例 DIP は改善した。
- 3) DIP 発症例の検査に関しては、LDH 値と CRP 値が高値を示しており、その後の推移は病勢を反映していた。過敏性肺炎パターンで上昇しないとされる KL-6 は、今回の発症例でも高値は少なかった。
- 4) DIP 発症後の癌治療に関しては、癌治療開始まで 17-52 日を要したが、少量のステロイド内服の併用やより安全であると考えられるレジメンに変更して化学療法行ったところ周術期および再発治療において DIP の再燃を認めなかった。

したがって、乳癌治療に起因する DIP は危険因子の把握、十分なモニタリングと早急な治療開始が重要でその後の癌治療も十分継続できることが示唆された。本研究は乳癌治療における DIP の診断治療について有用な知見を提供しておりその臨床的意義は大きく、学位授与に値すると判定した。